

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13052

研究課題名(和文) 中世文学における「音楽儀礼学」の構築と実践

研究課題名(英文) The Construction and Practice of 'Musical Rituals' in Medieval Literature

研究代表者

猪瀬 千尋 (Inose, Chihiro)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：10723653

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：音楽儀礼に関わるテキストの読解を通し、儀礼における人の動きなどの実態解明、儀礼で行われる音楽の様相、それら音楽が持つ思想的役割などを明らかとし、日本文学、日本史、宗教史など、諸分野をまたぐ儀礼研究に一定の方向性を示した。

さらに儀礼における音楽を記した古典作品について詳しく読むことで、『古今著聞集』や『続古事談』などに見える、従来は文学的要素に乏しいと思われていたいくつかの説話について、新たな読みを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、諸資料を読解し、時代に即した「読み」を提示する、日本文学における一般的な方法ではあるが、扱うテキストは次第や式、唱導資料、従来扱われてこなかったもの、または文学と見なされてこなかったものであり、かかるテキストに新たな価値付けを行った点に、学術的意義が存在する。同時にそれは、新たな古典の読みの可能性を提示するものであり、一定の社会的意義を有するものである。

研究成果の概要(英文)：Through the reading of texts related to musical rituals, I clarified the actual situation of human movement in rituals, the aspect of music performed in rituals, and the ideological role of such music, and showed a certain direction for the study of rituals across various fields such as Japanese literature, Japanese history, and religious history.

In addition, by reading in detail the classical works that describe the music of ritual, I presented new readings of some of the anecdotes in "Kokon Chomon ju" and "Zoku kojidan" that were traditionally thought to lack literary elements.

研究分野：日本古典文学

キーワード：中世文学 儀礼 芸能史 音楽史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中世日本文学を軸とする音楽史研究は、個別の資料についての考察や、神楽や催馬楽等の特定領域に関する考察については、近年めざましい発展をとげている。一方で宗教史や音楽学などを見据えた複合的研究や、音楽そのものの特質に注目した研究は十分に論じられていない傾向にある。また林屋辰三郎『中世芸能史の研究』(岩波書店、1960年)は、文献学の立場から芸能音楽をとらえた研究として、今もなお参照されることの多い研究書であるが、林屋の指摘した芸能の問題は、その後の日本文学や日本史における音楽史研究には継承されていない。

一方、儀礼の実態を知る資料として、儀礼内での説法等を記した唱導文献が日本文学の領域でも注目されてきた。音楽と儀礼の問題を考えるためにも、こうした唱導文献の読解が肝要となる。

2. 研究の目的

以下の三点の分析を通し、音楽に関わる儀礼についての総合的解明を目指す。

(1) 音楽実際に発せられた儀礼空間

特に先例主義を規範とする宮廷儀礼と寺院儀礼においては、公家日記にその空間配置が詳細に記されており、文字史料からでも儀礼の場はおよそ復元可能なものが多い。この点を踏まえ、次第や式などの記録史料の読解を行い、儀礼の実際を明らかにする。

(2) 儀礼における音楽のありよう、芸能の問題

舞楽における舞の所作や、管絃における作法など、音楽儀礼における芸能の様相を明らかにする。

(3) 儀礼を形づくる思想テキスト

儀礼での説法の詞など、儀礼を形づくる唱導文献を分析し、音楽儀礼における思想性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 基礎資料の整理

音楽、儀礼についての資料を所蔵する諸機関での調査研究を行う。必要に応じて詳しい書誌をとり、音楽資料と儀礼との関係を明らかにする。

(2) 儀礼書・次第の分析

一つの事例研究として秘曲伝授儀礼に注目する。秘曲伝授は師匠と弟子の間で一対一で行われる師資相承儀礼であり、平安後期以降さかんに行われるようになった。儀礼を記した次第書について、詳細な読解を試みる。

(3) 芸能に関わる資料の読解

楽書や口伝、楽譜、舞譜などの読解を通し、管絃や舞楽などがどのように奏されていたか、舞われていたかを明らかにする。

(4) 唱導資料の分析

音楽に関わる儀礼のうち、特に関連する唱導文献が残るものについて内容の読解を行う。

4. 研究成果

(1) 基礎資料の整理

2019年度は海外赴任により、また2020-2022年度は閲覧が困難な機関が多かったため、当初は採訪調査を予定したものを変更し、マイクロフィルムやデジタルで最低限の書誌をとるようにつとめた。

また2020年度より所属機関が金沢大学となったため、金沢大学附属図書館蔵の資料や、金沢市図書館加越能文庫の所蔵資料(『松雲公採集遺編類纂』『葛巻昌興日記』など)等の調査を行い、前田藩の書物蒐集の実態解明につとめた。前田藩は持明院家、綾小路家の郢曲資料のほか、水戸徳川家とのつながりにより、『大日本史』編纂のための採訪調査に関わる資料も多数保存していたことが知られている。さらに書物奉行による書物の購入や書写が多数行われており、中世音楽を知るためには、最重要の文献群であると言える。この調査によって、特に貞享年間(1684-1688)の佐々木助三郎による京都採訪調査の資料の写しが、前田家にかつて蔵されていたことがわかった。

以上の成果については石川県における市民講座などで報告を行い、積極的に理論還元をはかった。

(2) 儀礼書・次第の分析

秘曲伝授資料の分析により、以下のことが明らかとなった。

十二世紀後半、藤原師長によって確立された秘曲伝授儀礼は、藤原貞敏以来の琵琶の血脈に受者(弟子)を位置づけることにあった。そうした思想的根拠を担うはずであったテキストが藤原孝道の『琵琶灌頂次第』であるが、実際の儀礼には影響を与えず、孝道が構想した帝王灌頂についても、後鳥羽院が受けた琵琶伝授は仏教色を排したものであった。

十三世紀に入ると天皇家や西園寺家でも琵琶灌頂の名称が使用されるようになり、仏堂や本尊を用いた伝授も行われるようになる。一方で、南北朝から室町時代にかけては、笙灌頂や箏灌頂も行われるようになり次第に灌頂も形骸化していく。

室町時代に入ると、和歌灌頂など俗側が行う灌頂も多様化していくが、こうした灌頂儀礼に琵琶灌頂が与えた影響は思いのほか少ない。和歌灌頂で「宝枕」の名称が用いられることなどに、わずかな接点を見出せるのみである。秘曲伝授自体は明治天皇の父である孝明天皇の代まで続くが、音楽の相承儀礼における宗教性は、十五世紀にはほとんど失われていた。

以上の成果については、2021年度に刊行された英文の論集にまとめた。

(3) 芸態に関わる資料の読解

林屋辰三郎以来論じられてきた、四天王寺楽人に関わる音楽儀礼についての分析を行った。その結果、元永元年(一一一八)三月三日平等院一切経会での舞楽「採桑老」奏楽が、宮廷社会において彼らがはじめて広く認識されて出来事であったことが明らかとなった。またこれに関連して、多資忠殺害事件についての分析を行った。この事件は、康和二年(一一〇〇)多資忠、時方親子が親類の山村正連によって殺害され、舞楽「胡飲酒」「採桑老」の伝承が途絶えたが、源雅実が忠方(近方兄)に胡飲酒を、四天王寺楽人・秦公貞が近方に採桑老を伝えたことにより、廃絶を免れたというものである。その結果、『古事談』『続古事談』『古今著聞集』など、事件を記す諸説話集が、それぞれ異なる立場をとっていることを明らかにした。例えば『続古事談』は採桑老の相承に否定的であるのに対して、『古今著聞集』は時宜に即した儀礼を是とし、楽の相承にも肯定的である点が明らかとなった。

以上の成果については、2022年度の中世文学学会秋季大会で報告を行い、同会の機関誌『中世文学』で論文としてまとめた(本課題終了時には校了済である)。

(4) 唱導資料の分析

唱導資料について、特に後白河院(1127-92)に関わる儀礼を中心に分析を行った。後白河院は今様を愛好したことで知られるが、同時代には安居院・澄憲や尊勝院・弁暁がおり、彼らの残した唱導が多く残っている。その結果、後白河院の儀礼の特色は御自行(自ら修行すること)にあり、院は御自行の目録を作成し、儀礼の折にはその目録を供養することもあったことが明らかになった。また従来は、不明であった院の四天王寺信仰の契機が、妻・建春門院の追善にあることも判明した。その後、後白河院の四天王寺信仰は、太子信仰へと傾いていったが、この背景には救世観音が本朝に仏法が伝わった際の仏像であるという説に基づく、院の仏教始原への回帰が背景にあることが推定された。また院の最晩年の嘗為と唱導には、院を釈迦に重ねようとする意図がうかがわれることも明らかとなった。

以上の成果については、2021年度の仏教文学学会大会で報告を行い、次年度刊行の同会の機関誌『仏教文学』で論文としてまとめた。

なお、かかる澄憲の言説の分析の過程で、廃曲の能《重衡》に見える一句「寒林に骨を打つ霊鬼は」の詞が、作品内において重要な思想的意味を持っていることが明らかとなった、この点については『アジア遊学』誌上に報告を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 猪瀬千尋、中野顕正	4. 巻 47
2. 論文標題 澄憲『法華経釈』提婆達多品第十二 校注稿(1)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学国語国文	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 猪瀬千尋	4. 巻 -
2. 論文標題 能《重衡》の表現と思想 「寒林に骨を打つ霊鬼は」の句をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 138-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 猪瀬千尋	4. 巻 -
2. 論文標題 八条女院の一筆大般若経・五部大乘経 魔との対峙	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『宗教遺産テキスト学の創成』	6. 最初と最後の頁 321-338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 猪瀬千尋	4. 巻 -
2. 論文標題 貴山と中世聖徳太子伝	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことば・ほとけ・図像の交響 法会・儀礼とアーカイヴ	6. 最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 猪瀬千尋	4. 巻 -
2. 論文標題 The Consecration to the Art of the Biwa (Biwa Kanjo)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Rituals of initiation and consecration in premodern Japan : Power and legitimacy in kingship, religion, and the arts	6. 最初と最後の頁 421-434
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 猪瀬千尋	4. 巻 34
2. 論文標題 新出今様琵琶譜追考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 梁塵	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 猪瀬千尋	4. 巻 3
2. 論文標題 Medieval Buddhism and Music: Musical Notation and the Recordability of the Voice	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in Japanese Literature and Culture	6. 最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 猪瀬千尋、中野顕正	4. 巻 48
2. 論文標題 澄憲『法華経釈』提婆達多品第十二 校注稿(2)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢大学国語国文	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 猪瀬千尋	4. 巻 68
2. 論文標題 元永元年の採桑老 四天王寺の舞楽をめぐる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中世文学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 猪瀬千尋
2. 発表標題 俊乗房重源について
3. 学会等名 中近世宗教学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 猪瀬千尋
2. 発表標題 後白河院における逆修と唱導
3. 学会等名 仏教文学学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 猪瀬千尋
2. 発表標題 長講堂について
3. 学会等名 中世歌謡研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 猪瀬千尋
2. 発表標題 「中世の仏教と音楽 書物という“知”を軸に」
3. 学会等名 第5回日本語の歴史的典籍国際研究集会国際共同研究「中近世日本における知の交通の総合的研究」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 猪瀬千尋
2. 発表標題 「元永元年の採桑老 四天王寺舞楽とその芸態をめぐって」
3. 学会等名 中世文学会秋季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 猪瀬千尋
2. 発表標題 秘仏と可視・不可視
3. 学会等名 宗教遺産をめぐる真正性 宗教遺産テキスト学の発展的展開
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------